

〔国際学研究フォーラム講演録 4〕

2015年11月18日（水）

英語道は武士道の延長である

講演者：松 本 道 弘
(絃道館館長)

司会者：木 本 圭 一
(関西学院大学国際学部教授)

英語道は武士道の延長である。

英語とは私にとり、格闘技。ディベートと共に、母校の関西学院（とくに高等部の時代）で、術（skills）を獲得した。「道」という原理・原則は、柔道から来ている。

「柔よく剛を制す」は、故ブルース・リーの極意と一致する。「剛」（hard）の英語は、筆記試験で測定できるが、「柔」（soft）の英語は学校や教室のテストでは測れない。

実社会での「行」。関学の mastery for service は、「行」のことである。

エリッヒ・フロムは、「愛とは行だ」と断言した。Love is a practice. と。キリスト教の愛が、武士道の愛と結びついた「きっかけ」は、この母校で産まれた。一方的なレクチャーではなく、コミュニケーションは、a two-way street であるべきだ。（本日も、参加者、私のアシスタントのハビック・真由香と共に、即興ディベートを遊んだ。「愛する方と、愛される方は、どちらが幸せか」という軽いテーマによる、バイリンガル・ディベートも、「遊学」の一部であったと自負している）。

英語道も武士道の延長で、西洋の騎士道に、惻隠の情（empathic feelings）を加えたものである。英語は、文法とロジックだけではない。テスト測定できない emotional intelligence（EQ：情感指数）を加味しなければならない。

では、多くの身近な問題（existential issues）をディベートし、critical thinking（即断思考）を鍛えなくてはならない。とっさのときに、判断できる critical choice は、国際的な現場に立たされる、関西学院大学の卒業生に不可欠だと思われる。

イエスカノウというのは、「知」で、そのどちらも、あるいは、その「間（はざま）」は、「情」に属する感性である。だから、学問には「遊び」が必要だ。関学時代の小生は、おおいに遊んで、学んだ。遊学の遊読（ludic reading）を薦めたい。

道という principle は、moral compass（道徳的羅針盤）と呼ばれている。おれない人物とは、principled persons（背骨のある人物）のことで、それは、武士道、究論道（The Way of Debate）を貫くタテ糸だ。きっと実社会で役に立つ。